
手紙を書こう

あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙を書こう

【Nコード】

N0652B

【作者名】

あきら

【あらすじ】

伝えたい想いがある。だから手紙を書こうってそう思ったんだ。

（前書き）

この小説は「小説家になろう」秘密基地」での、10月のテーマ小説「紙小説」参加作品です。他の作者さまの作品は「紙小説」で検索できます。

拝啓、お爺ちゃん。こっちはもう寒くなってきたよ。そっちはきつと穏やかな気候なんだろうね。

突然の手紙驚いたかな？　今まで一度もお爺ちゃんに手紙書いたことなかったね。

でも、今だから、どうしてもお爺ちゃんに伝えたい事があって、だから手紙を書こうって思ったんだ。

お爺ちゃんは、もちろんパソコンとか携帯なんて持ってたし、たぶん今でもそういうのは使えないんだと思う。

それにお爺ちゃんは私がまだ小さい頃、言ってたよね。

「手紙はな、直接本人が書くから暖かみが伝わる。かな、お前はなんか知らんが、そうやって機械で手紙書いてるけどな。そんなモン、人の心にも、物としても残らんぞ」

私がお爺ちゃんの目の前で携帯でメールを打っていると、よくそう言われた。

お父さんやお母さんは小さい私が携帯を使いこなしていると、かなちゃんはずいねえ、とか、将来立派になるぞ、とか言っただけで、お爺ちゃんだけは違っていた。

いつだったか、お爺ちゃんは古びた四角い缶を持ってきて、私に見せてくれたね。

中にはたくさんの手紙が入っていた。

「見てごらん。大事な思いを伝えてくれた手紙達だよ。お爺ちゃんの友達、それにお婆ちゃんからもらった手紙。全部大事にとってあるんだよ」

すごく達筆な字で書いてあったので、私にはよく読めなかったけど。

お爺ちゃんが言いたかった事は解った。

手紙の一つ一つが丁寧に書かれていて、中には送り主が自分で書

いた絵が描いてあったり。

まるでその人の生き方がその中に凝縮しているようだった。

「これはな、日本がまだ戦争してる頃。お爺ちゃんのお父さんが遠く離れた戦地から送ってくれた手紙だ。この中でも一番古い手紙だけど、一番大事にしてる手紙だ」

そう言っつて、缶の一番下から大事そうに一つの手紙を出して見せてくれた。

内容はほとんど解らなかつたけど、お爺ちゃん健康を気遣つていたり、学徒動員で戦地に向かう事になったお爺ちゃんを激励していたり、力強い文字で書かれていて、私にとっての曾お爺ちゃんが強く、優しい人だったんだって感じた。

「この手紙を最後に戦死してしまつてね。お爺ちゃんにとっては形見みたいな物なんだよ」

私はお爺ちゃんに手紙を返しながら、
「手紙つてその人が死んでも、その人が生きていた事を感じさせてくれるんだね」

と解つた風な事を言つたんだけど覚えてる？ 今思うと生意気な感じだよ。小学生のくせに大人びた事言つてさ。

お爺ちゃんは、その大きな手で私の頭を撫でてくれた。私、お爺ちゃんに頭撫でられるの、すごく嬉しかった。お爺ちゃんつて、些細な事でもよく誉めてくれたから、私はとても誇らしい気分になれた。

私が実家を離れ、遠くの大学に通う事になったとき、お爺ちゃんはとても寂しがつてたね。

「いいかい、かな。身体を大切にな。寒いときは暖かい格好をするんだぞ。夜はまだ冷えるから窓は閉めて寝るんだぞ」

とか色々言つてくれた。

その頃には私はお爺ちゃんの背を抜いていて、お爺ちゃんは小さく見えていたんだ。

そんな風に、もう子供でもない私をお爺ちゃんはいつまでも子供扱いしていた。

お爺ちゃんから見たら十八歳なんてまだまだ子供だったんだろうけど。

一時期は口うるさいお爺ちゃんがちよつと煩わしいかなどか思ってたけど、離れてみるとその温もりが懐かしくなつたんだよ。

大学時代。お爺ちゃんに手紙を書こうと思つて便箋やら、色々買つてきた。でも、なんだか恥ずかしくつて結局出さずじまい。

だつて夏休みやら冬休みには必ず帰っていたし、お爺ちゃんになんて書いたらいいか全く解らなかつたし……。

もしあの時手紙を書いていたら、きつとお爺ちゃんは大喜びしてくれただろうね。

長期休みに帰つて、

「お爺ちゃん、ただいま」

つて言つたときの、あのお爺ちゃんの笑顔。今でもはつきり覚えてるよ。

ああ、忘れられないと言えば私の結婚式の時。お父さんやお母さんよりもボロボロに泣いてたね。

それを見たら私もすごく寂しくて、嬉しくて、泣いてしまった。

どんなスピーチよりも、あのお爺ちゃんの号泣が私にとって一番嬉しかった。

ありがと、お爺ちゃん。

私は今、幸せに暮らしてる。

だから何も心配しないでね。

私はいつまでも、いつまでもお爺ちゃんの孫だから。つてちよつとありきたりな言葉だね。

でも本当にお爺ちゃんの孫でよかったつて思う。

お爺ちゃんは私に優しくかった。

うつん、私だけじゃない。周りの人みんなに優しくかった。

だからきつと、お爺ちゃんにはたくさんの手紙が残ってるんだね。そして、その一つ一つ大事にとってあって……。

きつとお爺ちゃんに手紙を送った人たちだって、嬉しいと思う。私のこの手紙もそんな中の一つになるのかな？

そう思ったら、もつとちゃんとした手紙書かなきゃって思うけど

……。

私は今まできちんと手紙なんて書いたことないから、こんなものでいいよね。

お爺ちゃん。もう一年以上会ってないんだね……。

この一年。色んな事があったよ。

お爺ちゃんにいつぱい、いつぱい報告したい事があるんだ。

私、子供ができたんだよ。

お爺ちゃんにとつては曾孫だね。

いや、まだ産まれてないんだけどね。お腹の中にいる。

だいぶ大きくなってきて、毎日毎日蹴ってくるんだよ。

もうね、本当に産まれる前からやんちゃで、今から色々心配だよ。

自分の中に新しい命があるんだ。

不思議だよな。

お爺ちゃんが生きていた証。

こうやって子供が産まれて、お爺ちゃんが、頑張つて生きてきたその意味が受け継がれていく。

それはきつと、あの缶の中の手紙と同じで、その人が生きていた証。

なんて、ちょっと大げさかな。

でもね、思うんだ。こうやって命はまわっていくんだなって。

ねえ、お爺ちゃん。

天国はどう？ 私、お婆ちゃんに会ったことないけど、きつと今一緒にいるんだろうね。

お婆ちゃんにもよろしくお伝え下さい。

あなた達の子孫は、今日もとても元気です。

かしこ。

――――

私は書き終わった手紙を丁寧に折り畳み、封筒に入れる。
そして、お爺ちゃんの古い缶の一番上にそっと置いた。

（後書き）

今回は直球勝負です。

ど真ん中ストレート。

何のひねりも毒もアクもない。

単純明快に手紙をテーマに書いてみました。

が、直球勝負できるほどの腕がなかった。

もう少し個性的なエピソードを含ませる事ができれば

もっと良かったかと思えます。

練りこむ時間がなかった。

言い訳です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0652b/>

手紙を書こう

2010年10月8日15時20分発行